The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	現代マレーシアにおける「イスラーム化」の研究
Author(s)	多和田, 裕司
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39703
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【2】

氏　　名	多和田　裕　司（たわだ　ひろし）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　12151　号
学位授与年月日	平成7年11月27日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間科学研究科　人間学専攻
学位論文名	現代マレーシアにおける「イスラーム化」の研究
論文審査委員	(主査) 教授　青木　保 (副査) 教授　井上　俊　　助教授　小泉　潤二

論文内容の要旨

本稿の目的は，現代マレーシアにおいてさまざまな形で進行中の「イスラーム化（イスラーム復興現象）」について，文化人類学的な視点からの考察をくわえることにある。多民族国家マレーシアにおいて，人口の約半数を数えるマレー系の人々（すなわちムスリム）の間に確実に拡がりつつある「イスラーム化」の動きは，いったいどのようなものとして理解されるべきなのであろうか。それは世界の他の地域において見られる「イスラーム化」現象一般のなかに解消されるものなのであろうか。それとも，特殊マレーシア的なものとしてとらえなければならないものなのであろうか。このような問いに答えるためには，あるいはそれをもとにして「イスラーム化」についてのさらなる一般論の構築を目指すためには，なによりもまず，個々の地域，時代における「イスラーム化」の実態があきらかにされなければならない。本稿において試みられるのは，長期にわたる人類学的な実態調査を踏まえたうえで，現代マレーシアで展開される「イスラーム化」のメカニズムを解きほぐしていくような作業である。

まず第Ⅰ章では，「イスラーム化」を論じるためには，イスラームへの回帰を反西洋の動きへと還元する従来の文明論的な枠組では不十分であり，それにかわるものとして，イスラームの「理念」と社会的「現実」との相互作用のなかに「イスラーム化」の具体的事例をとらえていくような枠組の必要性が指摘される。イスラームとは，それに内在する論理として「イスラーム化」への指向性をそなえた宗教であり，イスラームの実践とは，その論理が個々の社会的現実のなかで実現された姿にほかならない。したがって，「イスラーム化」現象について理解するためには，（イスラーム学におけるような）教義論的なイスラーム理解でも，（村落研究を中心とした）個別社会論的なイスラーム理解でもない，あらたな方法が必要とされるのである。

第Ⅱ章においては，普遍的，教義的イスラームがマレー（マレーシア）という「現実」との相互作用のなかに姿をあらわしたものとしての，「マレー・イスラーム」のありようが論じられる。そのさい，まず第一に，個々のマレー・ムスリムの行動に焦点をあて，彼らがイスラームをいかに解釈し実践しているかという点について検討する。ムスリムはムスリムであるかぎりにおいて，つねにクルアーンとハディースに記された規範を「理念」として生きることが期待されている。しかし「現実」にはイスラームの「理念」をそのままに生きることは不可能であり，その意味で，ムスリムの

実践とは,「理念」と「現実」との間にどうしても埋めることのできない乖離が存在し，しかしそれにもかかわらず，それを埋めようとする終わりのない試みとしてとらえることができる。具体的にはそれは,「よりイスラーム的」であろうとする指向性となってあらわれる。イスラームの「理念」に与えられた絶対的な価値が，個々のムスリムをして「イスラーム的」な振る舞いにむかわしめるのである。第二に，そのような行動が具体化される場としての，マレー社会におけるイスラームの役割について考察する。ここでは，イスラームを介した結びつきが，社会関係の形成維持に重要な意味をもつものであることが，ある村の具体例にもとづいてあきらかにされる。たとえ十全にしたがうことは不可能であるにしても，イスラームの「理念」をより「強く」生きる者がもつ社会的「力」が，マレー人の人間関係を大きく決定するのである。第三に，多民族社会マレーシアという文脈のなかでのイスラームのありようについて言及する。マレーシアにおいては，本来すべての民族に開かれたものであるはずのイスラームが，マレー系の民族宗教的色彩をおびるものとなっている。しかもそのなかで，他民族に比して「マレー・ネス」を強めるような，特殊マレー的なイスラーム解釈すら生みだされたのであった。

第Ⅲ章においては，前章においてあきらかにされた「マレー・イスラーム」を，マレーシアの近現代史のなかで通時的に検討する。「マレー・イスラーム」はその歴史のなかではかならずしも一様なものではなく，マレーシア（マラヤ）の社会的状況に応じて，あるときにはその特殊性が強調され，また別のときにはイスラームの普遍性が強調されてきた。1970年代以降，現代にいたるまではまさにイスラームの普遍性を強調する時代であり，しかもその動きはマレーシアの経済発展や社会構造の変化，あるいはそれとともに激化していったマレー系内部の対立に大きく連動している。

第Ⅳ章，および第Ⅴ章では,「イスラーム化」がいかなるメカニズムのなかで発現されるのかについて，村落社会レベル（第Ⅳ章），州レベル（第Ⅴ章）における具体的事例にもとづいての考察がくわえられる。いずれの「出来事」も，一方でイスラームの「理念」と他方でそれが実現される社会的「現実」の相互作用のなかで，結果としてイスラームの「競りあがり」を見ることができるような事例である。

まず第Ⅳ章では，あるマレー系村落において催された婚姻儀礼を事例としてとりあげる。そのなかで，ひとりの儀礼当事者がとった行為は，従来の「マレー・イスラーム」のありかたからは逸脱したものであり，それを見聞きした人々にたいしてすくなからぬ当惑と混乱をもたらすことになったが，同時にマレー村落社会における「イスラーム化」を象徴的に示す出来事でもあった。すなわち,「よりイスラーム的」であろうとする指向性をかかえながらもイスラームによるものとは異なる行動規範をもあわせもっていた「マレー・イスラーム」にたいして，儀礼当事者たちもそのなかに含まれる政治対立の手段として,「理念」としての「よりイスラーム的」であらねばならないという指向性がもちだされた結果，なおいっそうの「イスラーム化」がもたらされたのである。

第Ⅴ章では，州レベルにおける政治対立と「イスラーム化」の関係が扱われる。具体的事例としてとりあげるのは，1990年から数年にわたってマレーシア・クランタン州において展開された酒類販売政策をめぐる論争である。与野党間でかわされた政策論争は，両者とも基本的には「同一の」前提に立っていたにもかかわらず，イスラームの「理念」という到達不可能なものを基準にしながら，自らの方がいかに「よりイスラーム的」であるかという主張によって争われていった。論争の過程で問われたのは，イスラームの「理念」と政治的「現実」との「妥協」をはかろうとするときの州与党であるイスラーム党の姿勢であり，その結果，野党からの批判を受けたイスラーム党の政策は，当初のものよりもより強く「イスラーム化」されたものへとかわっていったのである。

これらふたつの章は，マレー系内部の対立が「イスラーム化」を加速するという，現代マレーシアにおける「イスラーム化」発現のメカニズムを典型的にあらわすものとなろう。

最後に，結びの章においては，ここ一，二年のマレーシアにおける重要な政治問題を概観することによって，本稿で　論じられてきたようなマレー系内部の対立と「イスラーム化」とのかかわりが，現代マレーシアを理解するうえで，さらなる一般性をもった視点であることが提起される。

以上の議論を踏まえたうえで，現代マレーシアにおける「イスラーム化」を結論づけると次のようなものとなろう。すなわち，1970年代以降のマレーシアにおけるマレー系の地位の向上とともにマレー系内部の対立の激しさが増し，しかもその争いがムスリムにとって絶対的な正当性をもつイスラームの「理念」をめぐっておこなわれた結果，マレー

系社会，あるいはマレーシア全体の「イスラーム化」が必然的に「競りあがって」いくことになったというものである。もちろんこのような「競りあがり」の背景には世界的なイスラーム復興現象からの影響が存在する。しかし，現代マレーシアにおける「イスラーム化」とは，まずなによりも特殊マレーシア的なものとして理解されるべきものであり，「イスラーム化」についての一般論へといたるためには，本稿で試みたような個々の「イスラーム化」についての理解の積み重ねが必要とされるのである。

論文審査の結果の要旨

本論文は，現在世界的に大きな問題として学的に注目されている「イスラーム」現象を，マレーシアにおける文化人類学的フィールドワークによって明らかにしようと試みた研究である。

1980年代以降，マレーシアを含めたイスラーム世界において顕著になった「イスラーム化」現象（イスラーム復興運動）については，これまでにもさまざまな分野において取り上げられてはいるものの，その実体とそれが発現するメカニズムについては，具体的な事例研究をもとに詳細かつ包括的に調査研究した研究は，いまだほとんどないといってよく，本研究はその要求を満たす貴重な学的貢献である。これが本論文の第一の特徴である，第2の特徴として，文化人類学の文化分析の手法を導入することによる従来とは異なるマレーシア社会の研究と分析を示した点があげられる。マレーシア社会のさまざまな局面に見いだされる文化的現象としての「よりイスラーム的」という「指向性」が，1970年代以後のマレーシアにおける社会変化の中で，より強化される方向にあることが，具体的な調査を通して明らかにされた。これは本論文の独自な発見である。第3に，文化人類学における「イスラーム」研究に対して新しい可能性を切り拓いた点が指摘される。従来の文化人類学的「イスラーム」研究が，イスラームを普遍的な現象（教義）としてとらえるか，社会の中に生活実践として解消させるかのいずれかであったのに対して，本論文はマレーシアの「イスラーム」が人々の現実においては理念と社会的経験との相互作用の中に存在することを明らかにした。

本論文は，長期的で集中的な実態調査に基づく研究であり，イスラーム研究と文化人類学研究そして現代マレーシア社会の研究として，貴重な学的寄与である。以上の理由からきわめて高度な学術研究と評価し，博士（人間科学）の学位授与にふさわしい研究と認めるものである。